様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月２０日現在

機関番号：32647
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21730640

研究課題名（和文）：

偶発的契機によるキャリア形成とセレンディピティについての教育人間学的研究

研究課題名（英文）：

A pedagogical-anthropological research on serendipity and career development by accidental opportunity

研究代表者
走井　洋一（HASHIRII YOICHI）
東京家政大学・家政学部・准教授
研究者番号：30347843

研究成果の概要（和文）：
本研究の成果は以下の 3 点にまとめられる。第 1 にキャリア形成上の偶発的契機は誰にでも生じるものであり，外部から降りかかるものであるということである。第 2 にこうした偶発的契機の受容には，自己認識の変容が必要であるということである。この自己認識の変容には，社会的関係における自己変容と，その自己変容を受け入れた自己認識の変容が含まれている。第 3 にこうした自己認識の変容に対しては，社会的関係の組み直しが必要であること，また身体的なかかわりによる支援が必要であることである。

研究成果の概要（英文）：
The results of this research are summarized in the following three points. First, in career development accidental opportunity from the outside happen to anyone. Secondly, to accept these accidental opportunity needs transformation of self-awareness. The transformation of self-awareness contains self-transformation in social relations and transformation of self-awareness to accept the self-transformation. Thirdly, transformation of self-awareness needs re-construction of social relationships and support by physical relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９ 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０ 年度	500,000	150,000	650,000
２０１１ 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育哲学，教育人間学，キャリア形成，キャリア教育，社会的排除

1.　研究開始当初の背景

産業界からの要請あるいは若年無業者（ニート）やフリーター等の増大への対応という要求を背景として，キャリア形成が就職という明確な目標への形成，つまり直線的なプロセスであると認識され，そのもとでキャリア教育やキャリア形成支援が考え

られるという現状があった。これらの問題点は，ブリッジズ［1980=1994］の「トランジション」論や，ギャレット［1989］の「積極的不確実性」，クルンボルツ［1999］の「計画された偶然性」などによってすでに言及されてきた。また，教育学においても，ボルノー［1959］が『実存哲学と教育学』のなかで教育の非連続的形式として偶発的契機が人間形成に影響を及ぼす可能性をすでに定式化しており，キャリア形成を人間形成の一様態として理解するならば，「トランジション」論に代表される，キャリア形成途上における偶発的契機の受容は，ボルノーの定式のもとで捉えることが可能である。

しかし，これらの議論は偶発的契機が人間形成やキャリア形成において重要な意味をもっていることを明らかにしているものの，その契機を受容できない場合についてはそれほど考慮されてこなかった。そのため，若年無業者やフリーターなど偶発的契機をうまく受容できないでいる人たちが，なぜそれらをうまく受容できないのか，あるいは受容するにはどのような能力を要するのか，などについてはこれらの定式化のもとでさらなる検討を必要としていたといってよい。

BOLLNOW, O. F.［1959］*Existenzphilosophie und Pädagogik: Versuch über unsetige Formen der Erziehung*, W. Kohlhammer Verlag.
BRIDGES, W.［1980=1994］*Transitions: Making Sense of life's Changes*. ＝ブリッジス『トランジション』（倉光修・小林哲郎訳，創元社）.
GELATT, H. B.［1989］"Positive uncertainty: A new decision-making framework for counseling," In: *Journal of Counseling Psychology*, 36, 252-256.
MITCHELL, K. E., A. S. LEVIN & J. D. KRUMBOLTZ［1999］"Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career Opportunities," In: *Journal of Counseling and Development*, 77, 115-124.

2. 研究の目的

⑴ 既存のキャリア形成研究を踏まえた総合的な見地からのキャリア形成全体像の解明

生徒指導の一領域として扱われてきた進路指導と重なるところが多いキャリア教育については，これまで主として心理学領域からのアプローチが多く，その包括的な研究成果も報告されているが［渡辺, 2007］，先に問題として指摘した非連続的なプロセスをも含む多様なキャリア形成の全体像を提示するにはいたっていない。そこで，本研究では，教育人間学の立場から，これらの研究成果を引き入れつつ，包括的なキャリア形成についての枠組みを提示すること，とりわけ，偶発的契機を受容した際に生ずる非連続的なプロセスをも含んだキャリア形成の全体像を解明することを目指した。

⑵ キャリア形成における「セレンディピティ」の解明に基づく新たなキャリア形成支援の可能性の提起

偶発的契機が人間形成においてどのように受容されるかについての包括的な研究は，先に指摘したように，ボルノーによって先鞭が付けられており，キャリア形成についての研究においてもブリッジスらによってすでに行われていた。しかし，偶発的契機をいかにして受容するのか，あるいは受容するにはどのような状態である必要があるのかといった受容する側の能力や状態という観点では，先にあげたクルンボルツが主体性や努力の重要性を指摘する程度にとどまっている。本研究では，能力や状態を包括した，受容にかかわるプロセスを「セレンディピティ（serendipity）」と位置づけてその内実を解明するとともに，「セレンディピティ」がいかに生起するのかを明らかにすることによって，それを高める支援方策を提示し，キャリア形成支援の新しい可能性を開くことを目指した。

渡辺三枝子（編）［2007］『新版キャリアの心理学――キャリア支援への発達的アプローチ』，ナカニシヤ出版.

3. 研究の方法

本研究は，偶発的契機を受容することによって生ずる非連続的なプロセスを含むキャリア形成の全体像の教育人間学的な見地からの提示，偶発的契機を受容するプロセスとしての「セレンディピティ」の内実の解明，さらにはそれらに基づくキャリア形成支援・キャリア教育の新たな可能性の検討を，理論研究を中核としつつ，調査研究によってその妥当性を補完することで行った。

理論研究は以下の 2 点についての先行研究の検討を中心に行った。

⑴ キャリア形成についての研究成果の整理・検討

キャリア形成についての先行研究，とりわけ，教育学，心理学，社会学，経済学領域での研究成果を中心に整理し，教育人間学的見地からその体系化を図った。

⑵「セレンディピティ」概念の検討

科学研究の領域で広く認知されている「セレンディピティ」概念についての先行研究を整理・検討するとともに，キャリア形成の途上で生じる偶発的契機の受容のプロセスを「セレンディピティ」と位置づけ，その内実についての教育学，心理学，社会学，経済学領域での先行研究を検討するとともに，以下で実施した調査研究の成果を取り入れ，その内実についての新たな

見通しを模索した。

調査研究は以下のとおり実施した。

⑴ イギリスにおける社会的排除への支援・キャリア教育の現状調査

イギリス，特にロンドン，北アイルランドにおける社会的排除の状況にある人たち（移民，女性，政治犯罪者，障害者，等）と，彼らに対する支援の現状，すなわち，キャリアの形成途上に偶発的契機が生じた人たちがどのように他者や社会とのかかわりを恢復してきたのか，また彼らに対して支援を行っている NPO をはじめとした団体がどのような支援を行ってきたのかについての聞き取り調査を 2009 年度に実施した。

⑵ 労協若者自立塾での調査

2003 年度から「若者職業的自立支援推進事業」（厚生労働省）として行われた若者自立塾のうち，千葉県山武郡芝山町（2011 年 4 月から千葉県香取郡神崎町に移転）にある労協若者自立塾において，本研究に先立つ予備的研究段階であった 2007 年度から（本研究においては 2009 年度から），若者の就労支援における諸問題や支援の現状について継続的な聞き取り調査を行った。なお，労協若者自立塾は上記事業の終了に伴い，「緊急人材育成・就職支援基金」（厚生労働省）を利用した訓練を 2011 年度途中から実施することでプログラム内容が変更されたが，労協若者自立塾としての一貫性を保つ努力が続けられているため，政府の支援事業の変更による現場での支援プログラムの変更点を含めつつ，継続的な聞き取り調査を実施した。

⑶ しんじゅく若者サポートステーションでの調査

「地域若者サポートステーション事業」（厚生労働省）によって運営されている「しんじゅく若者サポートステーション」（以下，「新宿サポステ」と略記）において若者の就労支援における諸問題や支援の現状について，2010 年度以降，継続的な聞き取り調査を実施してきたが，特に 2011 年度については，新宿サポステが「東京都若者社会参加応援事業」（東京都）を利用して実施していた「若年無業者のためのパソコン講座――「人っていいなプロジェクト」」（3 ヶ月を 1 タームとする講座を 3 ターム）のなかの演劇ワークショップに，アクションリサーチ的に関与し，相談員や講座の講師たちとともに支援のあり方についての検討を行った。

⑷ 支援者のあり方についての聞き取り調査

2009 年度以降，青森県 A 短大のカウンセラーに支援者のあり方についての自己省察を行う場を継続的に設け，そのなかでカウンセラーとしての自己形成がどのように遂げられているかについての調査を行った。

4. 研究の成果

偶発的契機とその受容について必ずしも一義的に定式化できるものではないが，調査研究を含めた本研究では，以下のような見通しを得ることができた。

まず第 1 に，ボルノーが示していたように，偶発的契機は誰しもに外部から降りかかってくるものであるということである。キャリア形成が自己において生起する事態であるため，そこで生じる偶発的契機もまた他者や社会から独立した自己において生起する事態としてこれまで受け取られてきた。しかし，調査研究においても見出されたように，偶発的契機が生じる自己は他者や社会から独立しているわけではなく（なお他者や社会から独立して自己が存在するというこうした見方を「閉じた自己」とする），それらとのかかわりのなかで存在することが明らかになった。例えば，一見すれば本人の就労意欲の低さによって他者や社会とのかかわりを絶っているようにみえる事例であっても，その背後に社会的関係資本（ないしは「バッファ」）が弱体化，あるいは場合によっては消失した状況にある事例が見られた。もちろん，こうした事例を一般化することは危険を孕んでいるが，就労意欲は，独立した自己ではなく，他者や社会とのかかわりに存在している自己において生起するものであるため，その高低はそうしたかかわりに左右されるといってよい。つまり，偶発的契機は，自己と他者や社会とのかかわりにおいて生じるひずみが，特定の時期・状況において収斂して，自己に降りかかってくると考えられるのである。それゆえ，こうした偶発的契機が誰しもに生起すること，そしてまた自己において生じるように見えるが，その発端は自己と他者や社会とのかかわりのひずみにあること，さらにそれは必ずしもすべての人にとって困難として発現するものではないこと（この点は後に詳述），が明らかになったといってよいだろう。

第 2 に，こうした偶発的契機の受容には自己認識の変容が必要になるということである。例えば，労協若者自立塾の聞き取り調査において受講生が吐露した「自分の中で思い込んでいたことが覆されて，ああいいんだなぁと思った」という言葉には偶発的

契機の受容において自己認識の変容が生起していることを看取できる。ただ，ここでの自己認識の変容は，まず①他者や社会とのかかわりにおける自己の変容を前提としていること，そして②その自己の変容を受け入れて，自己認識を変容すること，の 2 つの段階，ないしは 2 つの側面において生起している点にも注意が必要である。つまり，この言葉から読み取ることができるのは，まず自己認識からはズレた自己の変容が生起し，それをうまく受け入れることができない状態（「思い込んでいた」という認識）が生じるが，それが「覆されて」自己認識の変容が生じたということである。そして，この 2 つの側面において生起する自己認識の変容が「閉じた自己」においてではなく，他者や社会とのかかわりのなかで生起することは先にも指摘したとおりである。ただこの点がキャリア形成支援，あるいはキャリア教育のあり方を難しくしているのだが，キャリア形成はどこまでいっても自己において生起することがらであるにもかかわらず，その自己が他者や社会とのかかわりのなかで存在しているということ，つまり，自己がそれらとのかかわりを排除しては成立しないという基本的な事実の再確認がここでは必要になったといってよいだろう。それゆえ，キャリア形成は自己が他者や社会とのかかわりにおける自己変容とそれに伴う自己認識の変容を遂げていくプロセスであるため，他者や社会がどのような状況にあるのか，より正確には自己をとりまくバッファがどのような状況にあるのかが，自己の変容のみならず，その自己認識の変容にとって大きなファクターを占めることになるのである。つまり，バッファの有無や強弱によって，自己の変容を要請する偶発的契機が深刻なものとなるかどうかが左右されるだけなく，その自己認識の変容を促すか否か，あるいは妨げるか否かを決定する要因ともなりうるということである。

第 3 にこうした自己認識の変容としてキャリア形成のプロセスを捉えた場合，キャリア形成の途上で降りかかってきた偶発的契機の受容への支援は，自己と他者や社会とのかかわりの組み直しを通じた自己認識の変容への支援と捉えることができる。つまり，偶発的契機の受容は他者や社会とのかかわりから独立した事態として生起していないため，それらとのかかわりを組み直すことによって，その受容への道筋が開かれるということである。ただ，ここで注意すべきなのは，こうした自己認識の変容への支援が必ずしも文字や思考など記号を前提とした形式知のみからもたらされるわけではないということである。より的確に表現するならば，身体的な働きかけが必要であるということである。といっても，何らかの作業を強制するということではなく，自己認識を身体において生起させるような支援を必要としているということである。偶発的契機をうまく受容できない人たちにおいて生起していたのは，まず他者や社会とのかかわりにおける自己変容がうまく生起しないこと，そしてその自己変容をうまく自己認識できないことであったが，それは自己の身体と思考とのズレを架橋できない事態として受け取ることができる。つまり，まず，自己は他者や社会とのかかわりのなかで変容を余儀なくされるが，その際にそうしたかかわりのなかでの自己の振舞いを最適化できないというかたちで自己変容がうまくいかない事態が生じるのである。そして，自己が他者や社会とのかかわりのなかで変容をしたとしても，その現実を適切に受け入れることができないという事態が生じる。このどちらも，自己の身体と思考とのズレから生じているといってよいだろう。前者については，他者や社会とのかかわりの認知（＝思考）とそこでの振舞い（＝身体）との間のズレとして，後者においては，自己の変容（＝身体）とその認識（＝思考）との間のズレとして生起しているからである。それゆえ，身体的な働きかけを通じて，身体と思考とのズレの解消が目指される必要がある。例えば，新宿サポステで実施された「若年無業者のためのパソコン講座――「人っていいなプロジェクト」」の受講者がそこで実施された演劇ワークショップを通じて他者や社会とのかかわりを恢復していたが，それは自己の身体と思考とを架橋する方途として，自己を身体的に表出し（＝演じ），それを再度自己に取り込む（＝観る）ことを通じて自己認識の変容を最適化することに寄与していたと考えられるのである。

5.　主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

⑴ 走井洋一，「体験活動と社会性の形成――身体の問題を手がかりに――」，『道徳と教育』，査読有，330 号，2012 年，43-52 頁

⑵ 走井洋一，「生涯にわたって学習するということ――教育哲学からみた「学習」――」，『東京家政大学紀要（1）人文社会科学』，第 51 集，査読無，2011 年，27-35 頁

⑶ 走井洋一，「人間形成における非連続的形式」，『プロテウス』，第 13 号，査読無，2011 年，45-58 頁

〔学会発表〕（計 6 件）

⑴ 走井洋一,「キャリア形成上の偶発的契機とその受容」,日本キャリア教育学会第 33 回研究大会,2011 年 11 月 13 日,日本体育大学(東京都世田谷区)
⑵ 走井洋一,「ディルタイにおける人間学の構想」,教育哲学会第 54 回大会,2011 年 10 月 16 日,上越教育大学(新潟県上越市)
⑶ 走井洋一,「言語活動の充実と社会性の形成」,日本道徳教育学会第 77 回大会,2011 年 7 月 3 日,長崎大学(長崎県長崎市)
⑷ 走井洋一,「人間形成における非連続的形式」,日本ヘルダー学会 2010 年秋季研究発表会,2010 年 11 月 28 日,東北大学(宮城県仙台市)
⑸ 走井洋一,「社会性の形成と身体性」,日本道徳教育学会第 76 回大会,2010 年 11 月 21 日,大谷大学(京都府京都市)
⑹ 走井洋一,「社会性の形成と道徳教育」,仙台教育人間学研究会,2010 年 3 月 14 日,弘前学院大学(青森県弘前市)

6. 研究組織

⑴ 研究代表者
走井　洋一(HASHIRII YOICHI)
東京家政大学・家政学部・准教授
研究者番号:30347843

⑵ 研究分担者
該当なし

⑶ 連携研究者
該当なし